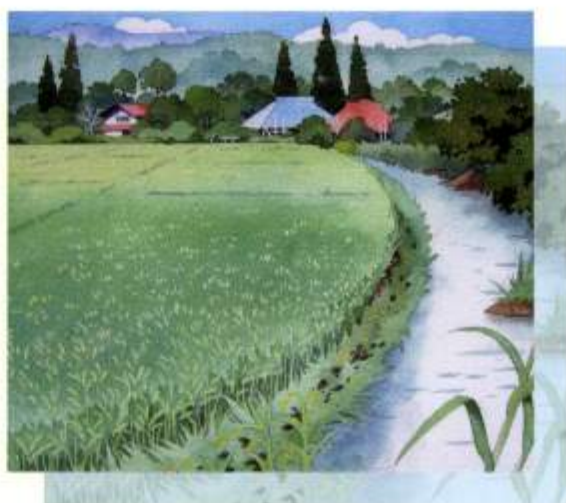


平成23年度  
喜多方市小学校農業科作文コンクール

# 作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

## 発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 菅井 一良

喜多方市の小学校農業科は、今年で五年目を迎え、いよいよ市内の全小学校十七校、千九百四十六名で実施することができました。ここまでの、地域の皆様、地元農業高校の皆様、教職員など本当に多くの皆様のご支援とご協力をいただきました。改めまして心から御礼と感謝を申し上げます。

さて、昨年は、三月十一日に発生した東日本大震災、そして、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染と、今までに経験したこともない大きな災害となりました。多くの方々が犠牲となり、ふるさとの避難を余儀なくされています。喜多方市にも避難所が設置され、百名以上の子どもたちが市内の小・中学校、幼稚園に通うことになりました。幸いここ喜多方市では、大きな揺れは感じたものの人命や建物への大きな被害はなく安堵しております。しかし、農業や観光業等への風評被害は大きな影を落としています。

農業科につきましても、保護者の皆様等から不安の声はありましたが、土壌、水、空間、すべての放射線量は低く、安全性が確認されたため、子どもたちの手洗いとうがいの励行、空間線量の調査、収穫した作物の検査等、

安心のための取り組みを行い、その都度ご理解をいただきながら、昨年同様の活動を維持することができました。

一年の活動を振り返る農業科作文コンクールも三回を数え、何と千八百二十八名もの児童から力作が寄せられました。応募された作品には、子どもたちの素直な感動や成長を垣間見ることができました。作物の栽培に失敗しても「また来年」、「今度こそは」と前向きに農業科に取り組む子どもたちの姿は、「たくましく生きる力」そのものです。大震災という困難を乗り越え、子どもたちが書き記した作文には、生きる喜び、楽しさがいっぱい詰まっています。大きな被害を受けた福島県の復興には元気が必要です。この農業科から子どもたちの元気を発信することにより、一日も早い福島の復興につながれば幸いです。

おわりに、お忙しい中、慎重に審査いただきました審査員の皆様、冊子の作成にご協力いただきました宮城学院女子大学の佐藤幸也先生と学生の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、皆様のこれまで以上のご支援とご協力をお願いいたしまして発刊にあたっての言葉とさせていただきます。

「農の営みが人を育てる」 ～喜多方の子どもの豊かな育ち～

福島大学 行政政策学類 特任教授 境野 健兒



一人ひとりが、米や野菜を育てるなかで、生き生きと学んでいることに感動しました。つらくて、いやいやながらというより、育てることが楽しいというのですから驚きです。もちろん、土をいじることが苦手な人もいたと思いますが、どんなきっかけで好きになったのでしょうか。育てる喜びを味わえる機会を得た皆さんがともうらやましく思います。種をまき、米や野菜がみずから育つことを支える、つまり草を取ってあげる、水をあげることで大きくして、人の命の営みにかかわるのですから、こんな素晴らしい挑戦は、他にないと思います。

こうした経験ができるのも喜多方市教育委員会が、農の営みが子どもを豊かに育てる力を持っていることに目を向けて、すべての小学校で農の営みを取り入れているからです。米や野菜を育てる知恵と力は、本を読むだけでは身につかず、実際にやってみないと分らないことがたくさんあります。米、サツマイモ、大豆、などを育て

てみると、人間として大切なことがたくさん学べるのだと、作文を読んで教えられました。

農の営みで、田植えの時の土のヌルヌルした感じ、野菜の青臭い匂い、干した稲の匂い、乾燥させた大豆のさやの堅さ、豆のとり出し方のコツ、稲を刈る力の入れ方、あるいは肥料の匂いなど、感じる力や作業のコツなどを身につけることができました。最近では、美しい花、きれいな緑や赤い色などと、目で見える世界を感じることが多いのですが、匂いを感じることは少なくなっているのではと思います。農の営みは、感性とか勘を育てていると作文を読んで感じました。

それから、驚いたことは人の動作を示す言葉がたくさんあることでした。主だったものをあげてみると「水くれ」（水を与える）、「土をよせる」、「掘る」、「まく」、「たばねる」、「かる」、「間引きする」、「ぬく」、「収穫する」など、たくさん言葉がありました。米や野菜を実際に育ててみると、人のたくさん動きが必要なのだということが分かります。科学技術の発達で何もかも便利になってきました。子どもたちの最近の動作では、指先で「押す」ことが多いと言われています。スイッチを押すだけで、ご飯がたけ、電気がつきます。テレビも選んで、遊びもできます。農の営みは体全部を動かすのですから、とても良い経験になると思います。

学校では知識を学ぶことも多いですが、農の営みは知識を覚えるよりは、動くことで知識を得るのです。野菜

が育つのは水、酸素、光が必要だとか、大きく育てるには土の栄養や間引きが欠かせないなど、自然にかかわることから知識を学び、しっかりと身につけることができます。特に、興味をひくのは地域の支援員の方から米や野菜を育てることを教えてもらって、経験者の腕と頭にちくせきされている知恵や技術、技に感動を覚える機会になっていることです。また、育てることで家族の顔が見えるようになって、家族のために役立ちたいと手伝いをするようになったと、家族や地域の支え合う関係を実感しています。凄い経験をしているんですね。

作文から、米や野菜を育てることは、人の育ちを豊かにしていることをあらためて教えられました。考えてみれば、機械が生活を便利にしてきたのは今から約百数十年前からですが、農の営みは二千年以上の前からです。人間は農の長い歩みを通して、感性や知恵や勘、知識を育ててきたことを考えると、皆さんが取り組んでいる農からの学びは、人の成長の歩みを短期間に学んでいるかのようです。このように、経験することで人が育つ歩みを喜多方の小学生の皆さんはしっかりと学んでいるように思えるのです。自然の力や米や野菜が子どもを育てるのではなく、そうした自然へのかかわりが人を育てるのですから、学校での米や野菜づくりの挑戦はほんとうの生きる力を育んでいるのだと思います。

入  
賞  
作  
品

## 目次

### 【最優秀賞】

えだ豆

堂島小学校

三年

辰野 楓真

11

おいしい野菜は、笑顔のもと

慶徳小学校

四年

阿部 愛花

12

米作りで思ったこと

加納小学校

五年

長谷川 捺生

13

農業の学習の思い出

熱塩小学校

六年

小林 明夏

14

### 【優秀賞】

楽しかった農業学習

第三小学校

三年

菊地 ほのか

15

食べ物の大切さ

上三宮小学校

四年

遠藤 雅也

15

作物のいのちのつながり

塩川小学校

四年

関本 美紅

16

協力して作れば・・・。

松山小学校

五年

福島 諒華

17

種から始まるいのち

第二小学校

六年

山口 紅葉

18

### 【佳作】

がんばって育てた大豆

第一小学校

三年

松下 愛美

19

たいへんだった大豆作り

松山小学校

三年

相田 陽南

19

さつまいもをしゅうかくしたよ

塩川小学校

三年

小澤 舞南香

20

おいしい小豆

松山小学校

四年

佐瀬 日和

21

一年間の農業をふりかえって

豊川小学校

四年

小島 玲南

22

農業科で学んだこと

慶徳小学校

五年

佐藤 祐斗

23

命を育てる農業の大切さ

熱塩小学校

五年

菅井 日菜乃

24

米作りで学んだこと

塩川小学校 五年 星 創太郎 25

野菜を育てるむずかしさと楽しさ

姥堂小学校 五年 唐橋 智 25

「農業」から学んだこと

第一小学校 六年 薄 怜奈 26

農業科学習で学んだこと

関柴小学校 六年 小田切杏香 27

【第一次審査通過作品】

食品になる前のくろう

第一小学校 三年 岩田 天音 29

大豆を育てて

第一小学校 三年 落合 勇斗 29

初めてのサラダパーティ

第二小学校 三年 湯上 采 30

自分で育てられた野さい

豊川小学校 三年 齋藤 隆汰 31

一年に一度のいちごの収穫

熱塩小学校 三年 檜澤 壮空 32

はじめての野さい作り

加納小学校 三年 渡部 真央 33

ピーマンを育てて思った事

第一小学校 四年 栗原 実香 33

野菜を育てて感じた事

第二小学校 四年 鈴木菜緒子 34

農業科の思い出

豊川小学校 四年 大江 純 35

生きている物を育てる

加納小学校 四年 長井穂乃実 36

がんばった農業科

姥堂小学校 四年 湯浅 諒也 37

農業の大切さ

駒形小学校 四年 斎藤 稜真 38

大豆ってすごい

山都小学校 四年 平井 理子 38

一年間農業をして

高郷小学校 四年 横川千亜希 39

はじめての田植え

第一小学校

五年

佐藤 暢晃

40

ぼくたちの主食を

第一小学校

五年

武藤 誠

41

私を変えた前田さんの言葉

第二小学校

五年

津田さくら

42

農業学習何のため？

松山小学校

五年

宮盛夏菜子

43

やさしさと一粒のお米

塩川小学校

五年

山内ひなた

44

農業って素晴らしい

第二小学校

六年

渡辺 夢子

44

里芋を作って

松山小学校

六年

川口 絢也

45

さつまいもを育てて感じた事

第三小学校

六年

真壁 日向

46

農業でみんなで協力野菜作り

熊倉小学校

六年

眞田 宜幸

47

今年の農業科にこめた思い

豊川小学校

六年

齋藤 優奈

48

楽しい農業

慶徳小学校

六年

加藤 伶

49

じゃがいもほりから学んだこと

堂島小学校

六年

蓮沼 璃子

50

喜多方市農業科に寄せて

「平成二十三年度農業科作文」から見えてくる子ども

たちといのちを育てる教育の大切さ

宮城学院女子大学教授佐藤幸也、佐藤研究室学生レポート

51

編集後記

54

## 【最優秀賞】

個人情報保護のため  
児童の写真を削除し  
ております。

### えだ豆

堂島小学校 三年 辰野 楓真

ぼくは、えだ豆を作りました。たがやしてある畑にたねをうえたとき「どれくらい大きくなるかなあ。」「元気に育つといいなあ。」と楽しみでした。

水やりは、えだ豆は五人全員いっしょに毎朝、行いました。ぼくはシャワーのような水やりがとても楽しかったです。えだ豆に「大きくなれよ。」と話かけました。みんないっしょうけんめいでした。

えだ豆の実はふくらんでくるとけっかんが見える位パンパンでした。実は七センチメートル、えだの高さは一メートルいじょうでした。バナナみたいな実がぼくはふしぎでした。

しゅうかくは手でおさえて取りました。クラス全員で行いました。力をあわせたから、早くおわりました。それを塩をつけてゆでて食べたらすごくおいしかったです。自分で作ったえだ豆は、おうちで食べているのよりおいしくてびっくりしました。

知っていますか？えだ豆はほして黒くなると大豆になります。大豆は、とうふやみそ、しょうゆにもなります。畑の肉と言われるほどえいようをたくさんもっています。ぼくはえだ豆を作ってから、えだ豆のことをいっぱい知りました。家族にも教えました。

そんな大豆をぼくは、大切だと思います。農業は毎日せわをしなければならぬから、大変だけど、育てるのはとても楽しいです。農家の人は、毎日大変だろうと思います。だからぼくたちは、おいしい野さいを食べることができると思いました。

ぼくの家でも、野さいを作っています。ぼくはいままで田んぼの手つだいをしてきました。これからは、作業が今まで以上に楽しくなると思います。農業は、さい高です。

個人情報保護のため  
児童の写真を削除  
しております。

## おいしい野菜は、笑顔のもと

慶徳小学校 四年 阿部 愛花

十一月九日、学校で収かく祭が行われました。メニューは、春から私たちが大切に育ててきた野菜で作った肉じやがと、ふかしいも、たきたてのごはんでした。私は、友達といっしょに、何度もおかわりして食べながら、前に、おじいちゃんの畑仕事の手伝いをした時のことを思い出しました。

私は苗を植えながら、野菜作りは大変なことが多いのに、どうして続けるのかと、おじいちゃんにたずねました。すると、

「おいしい野菜を作れば、家族みんなが笑顔になるからだよ。」

と、答えてくれました。毎日一生けん命育てることは大変だけど、大変な思いをして作った野菜ほど、おいしい料理

に大変身します。そして、そのおいしい料理を食べた私達は、おいしいねと言って、みんな笑顔になります。おじいちゃんは、野菜作りを通して、家族を明るくしてくれていたのだということに、私は初めて気づきました。

収かく祭を思い出してみると、自分達で、たくさん汗を流して育てた野菜は、どれもおいしくて、友達と楽しく話をしながら、一つも残さず食べました。学校でとれた野菜を家に持ち帰った時も、家族がすごいねと笑顔で返してくれました。やっぱり、おいしい野菜が出来た時は、みんな笑顔になるのです。友達や家族がおいしいと笑顔で返してくれると、作って良かったな、また来年も野菜作りをしたいなという気持ちになります。おじいちゃんも、きつと、わたしと同じ気持ちでいつも野菜を作ってくれていたのだと思います。

おいしく育つようお願いをこめて、一生けん命育てれば育てるほど、おいしい野菜になり、みんなの笑顔が増えるなんて、野菜作りには、とてもすごいパワーがあるのだと思いました。農業科の学習を通して、わたしは、前よりもつと野菜作りにきょう味を持ちました。来年は、どんな野菜が育ち、どんな笑顔が見られるか、今からとても楽しみです。

個人情報保護のため  
児童の写真を削除  
しております。

## 米作りで思ったこと

加納小学校 五年 長谷川 捺生

私は、ご飯が大好きです。でも今まで、米作りを一からやったことは無く、家の米作りを去年から手伝うようになっていたぐらいでした。でも、加納小では、米を毎年五年生と六年生で総合の時間に作っているのです、すごくワクワクしていました。でも、

「家族でも苦労して作っているのに私に出来るかな。」と少し心配な部分もありました。

私は、田植えが一番印象に残った作業でした。ドロドロした田んぼに手で苗を植えていくのは分かっていましたが、田植えをする時にはく長くつがあるのは、初めて知りました。ドロドロした田んぼに入って田植えをするのは、ちょっといやだったけど意外と楽しかったです。家ではやったことがなくて、初めての田植えだったのできこちなかった

けど、まあまあ良くできたと思います。田植えを手でやる前に機械で苗を植える体験をした人もいました。やっぱり機械で植えるのは速くてきれいに植えられていました。でも、機械だと子供には操作が出来ないし、危なくて出来ないのです、私は手で植える方がいいなと思いました。私の家でも学校の田んぼより大きな田んぼに苗を手で植えています。だから、田植えの作業は、家の人が毎年、大変な思いをして田んぼに苗を植えているというのが分かりました。

私は地震の後から風評被害で福島県には観光客が来てくれなくなつたというニュースを何度も見えています。原発事故のせいで食べていけないといわれてしまった食べ物があったり、せっかく農家の人が苦労して野菜や米を作ったのに出荷停止になったりしたニュースも何回も見ました。私はそういうニュースを見てすごく悲しく思いました。でも喜多方のお米は安全ですごくおいしいです。だから喜多方のお米を他の県の人に食べてもらいたいなと思いました。そして、福島県へ来る人が増えるといいなとこの米作りで思いました。

個人情報保護のため  
児童の写真を削除し  
ております。

## 農業の学習の思い出

熱塩小学校 六年 小林 明夏

私が四年間の農業学習をして心にのこった事が四つあります。

一つ目は、五年生のときにした「笑顔の赤飯くばり」です。私たちが育てたあずきを使って赤飯をつくりました。いろんな人に手伝ってもらったのでとてもおいしい赤飯ができました。そして、一人暮らしのおばあさんやおじいさんにくばりました。その時に、

「ありがとう」

と言ってくれました。泣いてよろこんでくれた人もいてびっくりしました。それと同時にうれしくもなりました。その時の事がとても心に残りました。

二つ目は、六年生になって学習した「心を耕すファームステイ」です。いつも給食に野菜を届けている農家の方の

家に行って農業のお手伝いをしました。初めてした学習だったので、思っていたより難しかったです。でも農家の方の苦勞が分かったので、これからする農業の学習などに、生かしたいと思いました。また、家でも手伝いたいです。

三つ目は、「稲かり」です。私は、六年生なので稲をかる仕事でした。これは前もしたのでなれていたけど、稲を運ぶのが重かったです。私は、友達と一緒におちていた稲も拾いました。そのときは、一粒でもむだにしないように心をこめて拾いました。

最後は、「収穫祭」です。最初に皆であんこもちを食べました。次に、私はつゆもちときなこもちを食べました。どれも全部やわらかくておいしかったです。つけものもおいしかったです。この収穫祭は、私たちにとって最後の収穫祭だったのでとても心に残る楽しかった思い出の一つになりました。

私は、この四年間農業の学習をしていろんな事を教わりました。それは、「命」がとても大切だという事です。野菜や米を育てて、私たちは、たくさん「命」をもらって生きていくんだと思いました。今までは、「いただきます」もただ言っているだけだったけど今度からはちゃんと感謝しながらいただきますです。

## 【優秀賞】

### 楽しかった農業学習

第三小学校 三年 菊地 ほのか

六月のはじめに、「大きくなあれ。」と心のなかでいいながら、一年生から六年生の人といっしょに、さつまいもを植えました。私は今年で、農業学習は三回目です。私が、さつまいもをふしぎだと思ったことは、じゃがいもは、じゃがいもをうえるのに、さつまいもは、くきで育つことです。やさいは、いろいろな植え方があるんだなあと思いました。それと、さつまいもは、よこにうえることがわかりました。さつまいものなえは、細くてかるかったです。でも、そんな小さなえがあんな大きなさつまいもになるとは、私は、さつまいもがすごいと思いました。あと、さつまいもにえいようをくれる土、水、太陽もすごいです。自然は、いろいろなやさいを作ってくれるんだなあと思いました。

私のばあちゃんがはたけしごとをしているけれど、わたしもそのやさいが育っていく楽しさがわかりました。私は、ばあちゃんみたいになりたいです。私はこんど、ばあちゃ

んのお手つだいもしたいです。やってみたいのは、さつまいもです。なぜかというと、また、おいしいさつまいもを食べたいからです。ばあちゃんみたいな人になるまでがんばり、そして、おとなになったらばあちゃんみたいなのはたけしごとのめいじんになってみんなにしんせんなさつまいもやいろいろなやさいをたべさせてあげたいです。来年は、はんがかわるのでとっても大きなさつまいもをとりたいです。そして、ばあちゃんがさつまいもをうえるときにはてつだいたいです。さつまいもをほるときは、妹とほっていつぱい食べたいです。

### 食べ物の大切さ

上三宮小学校 四年 遠藤 雅也

ぼくは、農業科の学習で食べ物の大切さを学びました。お米を作ってみて思ったことがあります。田植えのあとすぐにいねかりをやつて、かんたんにお米が食べられると書いていました。でもその間には、草むしり、消毒、水かげんなど大変な作業があつてお米を食べるまでに苦労があります。作る人の大変さを知ったぼくは、ごはんを食べると

き一粒一粒かみしめて感謝しながら食べたいと思いました。

お米には、一粒一粒に神様がいるといわれています。それは、作っている人の気持ちなどがつまっているからだと思います。お米だけではなく、果物や野菜にも作っている人の気持ちがつまっていると思います。

ぼくは、今まであたりまえのように食べ物を食べていましたが、農業科で学習してからは何でも残さずに食べるようになりました。学んだことを家族に話したら、家の人が調理する時にも食べ物一つ一つを大事に料理しなければいけないと言っていました。食べ物を安心して食べられるのは、農家の人が大事に育ててくれて実った食べ物だからだと思いました。

今は、食べ物、スーパーにいけば手にはありますが、ぼくは、自分の手で見てさわって育てた食べ物に感謝しながら、収穫した物を食べたいと思っています。

これから安心して食べられるお米や野菜を、たくさん食べられる幸せが続けばいいなあと思いました。そのためにもぼくは、農業科で学習してきたことを伝えていきたいです。

## 作物のいのちのつながり

塩川小学校 四年 関本 美紅

わたしは、小さいころにおじいちゃんとおばあちゃんの畑でいっしょに手伝いをしていました。その時に感じていることがあります。それは、作物はわたしたちのように長くは生きられない。でも人間とにているようにかれてタネができて新しい芽が出てそのくり返しがなんどもくると言うことです。わたしは、そこまでの成長がどのようなにできるのかも気になりました。

そしてよくかんさつをして分かったことがあります。作物の命は一つでも何カ月もかけて育てると多くのタネがとれます。何カ月と言う事は、人間では短く感じてしまいます。でも、それは作物の命にとつてとっても大切で、人間でいうと子どもを育てるという事、小さい物でも自信をもつて必死に生きて次の作物の命を作ろうとがんばっているのが感じてきました。人間よりもすぐく小さな作物がこんなに早くできて新しい作物がタネができるなんてすごいし、福島の自然にも感じやしています。だからそのつながりがずっと続いて、作物の命がどれだけ大切なのか、多くの人に知られてほしいと思いました。

一つのタネは、その立場になって見れば、大切な命。その一つの命を育てるとすてきな物になって、かれて、タネができて、また多くの命と未来が作られる。作物は小さい物なのに、わたしたちより大きな力を持っていて、次の作物のためにがんばっているなんてわたしはすごく感しかったです。

今は便利な物がかい発されていますが、作物たちはわたしたちより必死に毎日大きくなろうとがんばっていると言う事が多くの人に知られてほしいです。

だからわたしは、作物を大切にして感しやをこめていつも食べたいと思います。おいしそうに食べて気持ちを作物に伝えながら食べたいです。

協力して作れば・・・。

松山小学校 五年 福島 諒華

私は、農業科が大好きです。なぜかという、自分で作れたらうれしいし、家の人に

「良かったね。」

と言ってもらえるからです。でも、今回育てた豆は、少し

しか実りませんでした。私には何が悪かったのかが分かりません。気候があわなかったのか、私達の育て方がもう少しだったのかという考えるけど、やっぱり分かりません。そこで私は作物と話が出来たらいいのと思いました。そうしたら、原因が分かるのにと考えたのです。でもそんなことは出来ません。だから農家の人はすごいと思いました。どうしたらそんなに上手に育てられるのかなと考えると、やっぱり経験なのかなと思いました。経験を積み重ねるごとにどんどんコツが分かってくるのかなと思いました。

あと、作物を思いやる心も大切なのかなと思います。気候の変化した時の工夫や大きく育ってもらうために何をしないといけないのかと考える作物への思いやりが大切だと思ったのです。そして、私の考えをおばあちゃんに聞くと、

「人間の赤ちゃんと同じだよ。」

と言ってくれました。私はおばあちゃんの話していた事をじっくり考えるとまさにそうだと思いました。なぜなら、赤ちゃんだって寒かったら泣いてしまいます。作物だって、寒すぎたりしたら、大きく育たないと思います。だから、作物もてきとうに育てずに人と同じようにあつかわないといけないと思いました。

私は、ふだんの授業もしっかりうけて雑草ぬきなどの基

本からやろうと思います。そうすれば今より、作物を思いやる気持ちが発達すると思います。それにいくら、実りが少なかったとしても、これは五年生全員で協力して作った豆です。だからきつといい豆だと思います。それと、家の人にもほめてもらえました。結果がどうしても私は、この豆が大好きです。だってこの豆は、五年生全員で協力して作った最高の豆だから。

## 種から始まるいのち

第二小学校 六年 山口 紅葉

「苗は、こうやって植えるんだよ……。苗から始まるいのちだから、ひとつひとついいねいに植えてあげようね。」

支援員さんが、苗を植えながら教えてくれました。私はその言葉を聞いて、『苗から始まるいのち』について考えました。

これまでに私は、農業科で種・苗をただ植えているだけで、いのちだなんて一度も考えたことがありませんでした。よく考えてみると、植えた種はやがて芽を出し、葉が大き

くなり、実をつける。成長する姿が人間とそっくりだなあと思いました。この成長こそが作物のいのちだと思います。だからこそ、苗はいいねいに植えなければなりません。

五年生で稲作を行った時、田植えや水の調節……。いろいろな手間をかけ、ついに稲かりの時期がきました。しかし、友達の一人の稲がかれてしまっていました。どうしてかれてしまったのだろうと悲しい気持ちになりました。

作物の気持ちを知るために、農業科はかせない学習なんだなあとは改めて感じました。

農業科で私が一番大切と考えることは、作物へ対する気持ちだと思います。農業を学習することで、作物・そして人の心も育つといいなあと思いました。その一つは支援員さんや地域の方々との交流です。こういうところが農業の素晴らしさなのだと私は考えます。

また、農業科で作った野菜を食べてたくさんの人達が笑顔になることも農業科のすごいところだと思います。

農業科に感謝したいです。ありがとうの代わりに草むしりに根気強く取り組んだり、農業への思いをいっそう強めたいです。

## 【佳作】

### がんばって育てた大豆

第一小学校 三年 松下 愛美

「今日も、草むしりするのお。」  
とわたしは正直いつも思っていました。

五月に豊子先生に大豆の育て方を教えてもらいました。

めが出てきた時にわたしは、本当に大きくなるのかなと思いました。三カ月も畑に毎日行きました。育てるためにはこんな大へんな思いをしなきゃいけないということがよく分かりました。夏休みが終わってまた畑に行ったら、草がぼうぼうでびっくりしました。それから毎日畑へ行って草むしりをしました。暑くて、わたしはちよつとおこつてやっている時もありました。でも、それをがんばってきたらごほうびのように大きく育ちました。

しゅうかくをして味見をしたら、小さいけれどおいしかったです。みんなががんばった味がしました。

じつはわたしは、畑とかで何かを育てるのがにが手でした。でもさいしよはいやだなと思っただけで、大豆を育ててみて、うれしいことがいっぱいあるので、すきになって

きました。大豆だけじゃなく、ほかの野菜いも、作った人の気もちがたくさん入っていることがわかりました。いつもはふつうに食べていたけど、わたしはこのごろ、ありがとうという気もちになりました。きゅう食でも、すききらいなくのこさず食べたいです。これから、ありがとうございますという気もちです。これからは、ありがとうございます。

ほかに、ちがうやさいも育ててみたいです。それもんしやをこめて作りたいです。

### たいへんだった大豆作り

松山小学校 三年 相田 陽南

わたしたちが今年育てた作物は、大豆です。三年生は、大豆を育てて豆ふを作りました。

春、大豆のたねをまきました。たねには、赤いものがついていました。わたしは、これはなんだろうと思いました。すると畑の先生が、これは、鳥に食べられないようにする薬だよと教えてくれました。わたしは、ちゃんとかふうがされているんだなあと思いました。

夏、とてもあつい中、大きく育った大豆とたくさんのご

草がはえていました。こんなにあついのには、大豆はちゃんと大きくなっていてすごいと思いました。草むしりをしていると、畑の先生が、ざつ草と大豆をまちがえてぬかないようにする方ほうを教えてくださいました。でも、なかには大豆をぬいてしまった人もいました。ざつ草をぬくたんびにあせがながれ落ちてきます。とてもつかれたけれど、これで大きくておいしい大豆ができるといいなと思いました。そして秋、とうとうしゅうかくです。わたしはとても楽しみでした。大豆をぬくとき、わたしはおもわず、「いたつ。」

と言ってしまったました。大豆の実のところがっていると手があたりました。でも、ぬいているうちに気にならなくなりしました。大豆は、一りん車四台があふれるくらいいっぱいしゅうかくできました。わたしは、とてもうれしくなりました。

冬、豆ふ作りです。しゅうかくするところにちょうど「すがたをかえる大豆」を国語で学習していたので、作り方はほとんど知っていました。でも意外とむずかしかったです。わたしのはんは、と中でしっぱいしそうになりましたが、さい後には、一番上手にできたというくらいうまくいきました。とてもおいしくて、家ぞくの間みなもよろこんでく

れました。大豆を育てるのは、とてもたいへんだったけれど、その分おいしい豆ふを食べることができました。来年は、畑で何を育てるのかとても楽しみです。

さつまいもをしゅうかくしたよ

塩川小学校 三年 小澤 舞南香

わたしたち三年生は、さつまいもをみんなで育てることになりました。

六月一日、三年生みんなで、さつまいものなえを植えました。場所は、中央公園の近くの畑です。土に少しあなを開け、その中になえを横にしてさしこみました。それから土をかぶせ、たっぷり水をやりました。わたしは、

「二年生の時より大きいさつまいもになりますように。」  
とおいのりしながら水をあげました。

それから水をやったり草をむしったりして世話をしました。どんどん大きくなりました。

そして七月十三日、草むしりといっしょになえのかんさつに行きました。葉の形は、ハートみたいな形で、大きさは手のひらくらいでした。色は黄緑色でした。くきの下の

## おいしい小豆

松山小学校 四年 佐瀬 日和

方が赤くなっていて、おもしろいなと思いました。土の中でさつまいもがどうなっているのか、見るのがとても待ち遠しくなりました。

九月二十八日、いよいよさつまいものしゅうかくです。

畑に着くと一面緑色でうめつくされていて、それだけでも大きく育ったなと思い、ますますほるのが楽しみになりました。土の中に手を入れほり始めると赤むらさき色が見えてきて、こうふんしてきました。でもほってもほっても終わりが見えません。すごく大きいのです。おくの方まで続いていて、五人がかりでほりました。つかれたけど、出てきたさつまいもは、わたしの顔の二倍もある大きいさつまいもでした。しぜんにえ顔になり、友だちといっしょに持ち上げました。

「うわあ大きい。重いな。」

ずっしりくる重さです。うれしさでいっぱいでした。

しゅうかくしたさつまいもは、みんなでやきいもにして食べました。やきあがったさつまいもを二つにわるとききれいな黄色であまいあまいさつまいもでした。こんなにおいしいとは思いませんでした。育てるのをがんばったからだと、うれしさでいっぱいでした。

私は、六月に小豆のたねまきをしました。畑の先生が「小豆はたねを二つ植えます。」

と教えてくださいました。なんでだろうと思ったら、きょうそうをするので大きく育ちやすいからだなんです。私は、三年生の時に育てた大豆のたねまきと同じ植え方だと思いました。この時、植物というのはおもしろいなと思いました。

夏休み前には、草むしりと土よせをやりました。すごくあせだくになりました。草が小豆のえいようをとったり、強い風で小豆がたおれたりするとせっかく育てた小豆がもったいないので、一生けん命やりました。

九月は、一番楽しみにしていた小豆のしゅうかくでした。はさみで小豆を切りとってしゅうかくしました。黒っぽい色のさやがいっぱいあつてみんなも私も

「きもち悪い。」

と言いました。でも、中の小豆はとてもきれいでびっくりしました。

去年は、あまり小豆がとれていなかったそうです。今年

は、たくさん小豆がとれるか心配でした。小豆のせんべつで、さやの中の小豆を見ると、くさっているのもあったけど、きれいな小豆がいっぱいあって安心しました。こんなきれいな小豆がいっぱいとれたのは、畑の先生が教えてくださったおかげです。小豆のたねまきは二つたねを植えることや土よせは小豆がたおれないようにやることなどいろいろ教えてくださり、勉強になりました。そして、家でも小豆を育ててみたいになりました。

これから、総合などで畑で何か育てる時は畑の先生に感しやの気持ちと大きく育ってほしいという気持ちをわすれないで育てていきたいです。

十二月にとうじかぼちやを作ります。自然のめぐみに感しやしながら、おいしくいただきたいです。

## 一年間の農業をふりかえって

豊川小学校 四年 小島 玲南

「うわ、鼻にツーンとくるよ、このにおい。」

みんなでおいしい野菜を作るために、四年生が学校全体分のEMぼかしを作りました。これは、代々四年生がやって

いるらしく、においが強く、つかんだ感じはやわらかく気持ち良かったです。後は三週間ねかせます。

四年生は、会津のきょう土料理のこづゆを作るために、里いもと人参、そして三年生で大豆のことを知り、いろいろな食材に変化する大豆を育てることにしました。

最初に三週間ほど前に作った、EMぼかしをまきます。前は鼻にツーンとしたけれど、今回は「こん虫ゼリー」のような、においがしました。こうやってまくと、学校で作る野菜のひりょうになっていい野菜になるはずです。そう思うとなんだか学校の人の力になったみたいで、うれしかったです。

ここからが種まきです。五月に里いもの種じゃなく、里いものを植えました。里いもの種はどんなのだろうと思っていたのでびっくりでした。それで、一つの里いものに必ず芽があるとはかぎらず、ないものもあれば、二つ三つあるのもあって、けっこうおもしろかったです。

今度は六月に大豆と人参の種まきをしました。大豆はふつうのより少しかたく、人参はすつごく小さくて、最後に葉っぱをかぶせました。虫、鳥がよらないようにと、かわかないようにで、それもひと工夫でした。

しゅうかくはとってもうれしくて、次の日にいいよこ

づゆを作りました。自分たちで作ったのでとってもおいしかったです。

私は、この一年間で「食べる」ということが、とても素晴らしいなと思いました。東日本大しんさいでひさいした人は一時、「食べる」ということができませんでした。そう思うと私はとっても幸せだと思いました。これから「食べる」ことをむだにせず、農業で体験した事を生かしていけたらいいと思います。

## 農業科で学んだこと

慶徳小学校 五年 佐藤 祐斗

三・一一東日本大震災と福島第一原発の爆発事故のために、今年の農業科の野菜作りと米作りはどうなるのだろうか。と心配になりました。もしかしたら、できなくなるのだろうか。去年は、みんなでじゃがいも、にんじん、白菜、お米と、たくさんの農作物を作り、収穫した野菜とお米を使って、カレーライスとキムチを作ってみんなと楽しく、おいしく食べたことが思い出されてなりませんでした。

放射能流出の様子に注意を払いながら、今年もまた、野

菜や米作りが行えることが決まった時は、うれしく思いました。「今年は何を作るのかなあ。」と、これから始まる農業科の学習へ思いをはせました。しかし、例年の野菜作り・米作りとは、少し違っていました。五月中旬に行われた田植えは、支援員の山健さんが運転する田植え機に乗せてもらって機械植えの様子をま近に見せていただきました。実際に田に入って、一苗一苗を手で植えることはできませんでした。普段は経験できないことをさせていただいたなあと思いました。田植え機による田植えのスピードにはほんとうにおどろきました。一度に八本もの苗が植えられていました。畑では、今年もじゃがいもを作ることになりました。支援員の武藤さんと高橋さんに力をお借りして、畑をたがやしていただきました。その後、手袋とマスクを身につけたぼくたちで、種いもを植えつけていきました。収穫までの間、成長の様子を観察してきたぼくは、稲もじゃがいもも、いつもの年と違う状況の中にあっても、いつもと変わらないたくましい成長を見せてくれたことに感動しました。

収穫した米でご飯をたき、じゃがいもを使って肉じゃがを作って、全校で会食しました。お土産でもらったじゃがいもを使って、家では朝ごはんのみそ汁を作ってもらいま

した。どちらもととてもおいしかったです。たいへんな環境の中でもよく成長し、たくさんの実りを与えてくれたことに感謝したいです。

## 命を育てる農業の大切さ

熱塩小学校 五年 菅井 日菜乃

私の通っている熱塩小学校では、総合的な学習の時間で農業をしています。毎年お米や、いろいろな野菜を育てています。農業科支援員の方たちや、地域の方々に手伝ってもらいながら農業を進めています。

私の家は専業農家で、お父さん、ばあちゃん、じいちゃんが朝早くから、夕方まで仕事をしています。私は小さい時から田植えや稲かりなどを見に行つて、機械に乗ったりしているだけで、農業の意味を分かっているいませんでした。私はくわや一輪車などで遊んでいました。それから私は小学生になり、熱塩小学校に入学しました。そこで、農業の大切さを知りました。農業科支援員の小林芳正さんが、

「稲を育てているのはだれ？」

と聞きます。私は「それは私たちがつくっているよ」と思

っていました。芳正さんは、

「稲をつくるのは稲。それを手伝っているのが私たちなんだよ。」

と言いました。私は「あっそうなんだ。」と、とても感心しました。

「そうか、私たちは稲が育つのを手伝っているんだ。育てているのは稲のほうなんだ。」

と、私は芳正さんのその言葉で農業の意味が分かった気がしました。野菜にもお米にも命があります。農業は命を育てている仕事です。このことを知った時、私は農業についていなと思いました。私はこれから農業の素晴らしさ、大切さをいろんな人に知ってもらい、農業をやる人が一人でも多くなってくれればと思います。

生きている物には命があります。食べ物にも、もちろんあります。私たちはそれらを食べて生きています。「いただきます」は命をもらって食べていることに感謝する言葉です。私たちは命をもらっている野菜やお米に感謝しながら作物を育てていきたいと思っています。

## 米作りで学んだこと

塩川小学校 五年 星 創太郎

ぼくは、米作りで学んだことが二つあります。

一つ目は、米作りの大変さです。ぼくは、初めて田植えからだっこくまでやりました。田植えは歩きづらいし、とちゅうでこしがいたくなつて、大変でした。稲かりは、一つずつかり取っていき、かり取った稲を束ねるのがむずかしくて、時間がかかりました。だっこくは、いろんな道具を使って、稲についているもみを取ります。少しの量でも、かなり時間がかかりました。一つ一つの作業をやっている時、とても体がきついこと、そして時間がかかることを実感できました。ぼくの家の周りの田んぼでも米作りが行われていますが、作業の大変さについて考えたことはなかった。農家の方々の苦勞を身近に感じるよい機会となりました。

二つ目は、米の大切さです。ぼくは農家の方にたくさん手伝っていただき、米作りの一部しか体験していませんが、しゅうかくしたお米で作ったおにぎりはとてもおいしくて一つぶ一つぶのお米がきちょうに思えました。農家の方は、一年をかけて作るのだから、お米への思いもきつともっと

強いはず。たまにご飯をこぼしたり、お茶わんにつきっぱなしで残したりすることもありましたが、もっと大切に味わっていかなくてはいけないと思いました。

今年は、せっかく育てた米からほうしやせい物質が出てしまったというニュースをよく耳にします。農家の方の気持ちを考えると気の毒で仕方ありません。会津の米は安心なので、大切に食べていきたいです。

米作りから、いろいろ考えることができてよかったです。

## 野菜を育てるむずかしさと楽しさ

姥堂小学校 五年 唐橋 智

「今年も失敗しないぞ。」と、私は当然の様に思いました。四年で作ったキュウリやトマト、さつまいもはどれも上手にできたので、今年もきつと、おいしい野菜ができると思っていたのです。しかし、今年は全部が上手にできたわけではありませんでした。

今年育てた野菜は、里芋・人参・長ねぎ・ポップコーン・白菜・大根です。人参は、一回の種まきではうまく芽がなくて、支援員の先生には、「水やりが足りないよ。」

と言われました。三回ほどまき直して、やっと何本か育ちました。ポップコーンは、大きく上手に育てられましたが、アブラムシが葉の裏にいっぱい付いたので、先生が薬で退治しました。

もっと大きな失敗は、白菜です。白菜は、夏休み中に種まきしました。小さい芽が出てきましたが、その後見る見るうちに虫に食べられてしまい、私は「これはもう、・・・だめだな。」と思いました。でも、支援員の方にきくと、「水をくれ続けると、これから大きくなるよ。」と教えてくれました。そして次の日、支援員の方は自分の苗を持ってきてくださいました。虫にやられた苗に、薬をふって、水を毎日くれ続けていると支援員の方がおっしゃったように、少しずつ葉が出てくるようになりました。私は、びっくりしました。私も、みんなも喜びました。支援員の先生にいただいた苗は、もちろん畑で立派な白菜になりましたが後から葉が出てきた苗も、畑で青々と大きく育ちました。特に、私の白菜は大きくなってみんなにほめられました。

今年の農業科で、私は野菜を作ることのむずかしさと楽しさを学びました。心をこめて育てれば後で大きな実になる事がわかりました。でも、虫にやられたり水やりがたり

なかったりと、うまくいかない事もあるとわかりました。いつも、上手に育てられるわけではありません。それだけに、大きく育った野菜をみると、とてもうれしくなります。これからも、私はむずかしくてもがんばりたいです。

## 「農業」から学んだこと

第一小学校 六年 薄 怜奈

米。それはわたしたちが生活するうえで、なくてはならないものである。その米を育てるのはだれだろう。その人は、どのくらい苦労を重ね、どのくらいの幸せを感じるのか。このごろわたしは、それをこの手で実感した。

わたしは田植えと稲かり、それぞれ二回ずつ体験したことがある。学年全員で、先生の話聞いてから田植えをした。土はどろどろしていて、バランスをとるのが大変だった。時間がたつと、だんだん慣れてきて、土のどろどろ感が気持ち良かった。近くでやっていた友達は進むのが速くて、わたしは追いつこうとがんばった。終わったときには体じゅうどろまみれで、顔にもどろがついている人がいた。田植えは、とても大変だったけど、友達といっしょにやつ

たからとても楽しかった。

何ヶ月かたち、また学年全員で前田植えをして育った稲をかった。鎌は稲をすばとかることができたのですごく気持ち良かった。つかれたときも、友達ががんばっていたからわたしも最後まで、一生けん命がんばることができた。一つぶ一つぶ大切に、見つけたのを拾うことができた。それは、友達、仲間がいるからこそ、生まれる気持ちじゃないかとわたしは思う。

自分達で作った米は、いつも食べているご飯よりおいしかった。自分で働いて得た物だからなのかな。とてもあたたかい味がした。

農業は大変。田植えや稲かりをして実感した。だけど、喜び、うれしさ、幸せもたくさん感じた。農業を何年もやるのは大変だと、楽しいけど大変だと、田植えや稲かりを体験した今でもそう思う。だけど、仲間と支え合ってやれば大変さも楽しさに変わっていくんじゃないかと、わたしは思う。

わたしは全然農業に興味が無かったけど、今回の体験で農業って楽しいなってちよっと思った。大人になったら農業を少しでもお手伝いしたい。少しでも役に立ちたい。それが農業から学んだ大切な思い。

## 農業科学習で学んだこと

関柴小学校 六年 小田切 杏香

六年生での農業科学習ではキノコ栽培と稲作を学習しました。特に稲作が思い出に残っています。

私が農業科学習で学んだことは三つあります。

一つ目はお米一つぶ一つぶの大切さです。種まき・稲刈り・脱穀を通してそのときに、一つぶでも、もみがおちていると、それが合わさってとてもたくさんの量になります。だからとても一つぶ一つぶは大切だと思いました。

二つ目は農業をやっている人の大変さです。現代はすべての作業に機械があり、短時間でできるけど、農業科学習では、ほぼ機械を使わずやったので、とても大変だなと思いました。また私達は多人数でやったけど、ばあちゃん、じいちゃん二人だけでやっています。とても時間がかかって大変だと思いました。

三つ目はできたときに感じる達成感です。思い通りに行かないときもあったけど、できたときはとても達成感があつて楽しかったです。特に稲刈りのとき、五年生が初めてかまを使って、よく分らないとき、

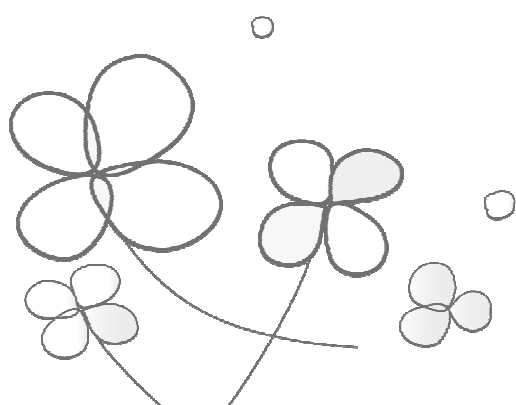
「かまはこうやって使うんだよ。」

と教えながら楽しく学習できました。

このように農業科学習で三つのことを学びました。他にもたくさん楽しいことがあり、たくさん思い出ができました。

今年は放射線などのえいきょうで少し心配でしたが、去年と同じように学習できてとてもうれしいです。これからも農業の力でもっともつと日本が元気になってほしいです。そして、私達がふつうに食べているお米一つぶ一つぶを大切に残さないようにしたいです。

農業科学習をやって、本当によかったです。これからの生活では、この学習で学んだことを生かして、ばあちゃん、じいちゃんのお手伝いをしたいです。そして農業をやっている人がどれだけ苦労しているか、心をこめて作っていることを忘れずに生活したいです。



## 【第一次審査通過作品】

### 食品になる前のくろう

第一小学校 三年 岩田 天音

みなさんは、大豆がいろいろな食品にすがたをかえていることを知っていますか。大豆は、しょうゆ、なっ豆、豆ふ、みそなど主な食品にすがたをかえています。三年生になって、その大豆を育てることになりました。

五月ころ、ポットにたねを植えました。土をかける時、とよ子さんが、

「そんなにかけるとめが出てこなくなるよ。」

と、アドバイスをしてくれました。「早く出てきてね。」と心をこめて植えました。

その思いがったわたったのか、何日かたつとめが出てきました。その時、わたしは「よかった、よかった。」と思いながら出てきためをながめていました。

めが出て何十日かすぎたころです。くきもりっぱに育ち、葉もふえてきたので畑に植えかえました。それから、何日か他のクラスと交代しながら水をあげました。

夏のはじめに、みんなで草むしりをしました。暑い中、

草まみれになりながら、ひっ死になってやったら、まるでわらをつんだのかと思うぐらい草が集まりました。

夏休みに入る前の日、前にとったえだ豆を食べました。

えだ豆を食べた時、「えつ、えだ豆って育てたつけ。」と思いながら食べていました。そのえだ豆は、わたしたちが植えた大豆だと知ってびっくりしました。

夏休みが終わり、すっかり秋のふんいきがする中、みんなで大豆をしゅうかくしました。前に見た時とは全くちがつて、さわただけで「ガサガサ、パリパリ」というぐらいかれていました。ねがはっていて、ぬくのにとでもくろうしました。

大豆は、さまざまな食品にかわる前にさまざまなくろうがあるのがわかりました。

### 大豆を育てて

第一小学校 三年 落合 勇斗

大豆を育ててみて、ぼくが一番楽しいと感じたことは、しゅうかく作業です。そして、一番うれしかったことは、自分で育てたえだ豆を食べたことです。なぜ、楽しかった

かというところ、それは大豆を畑から引きぬく作業がとてもおもしろかったからです。なかなかぬけない物もあったけど、スポツとぬけたしゅんかんはとても気持ち良かったです。

大豆を育てるには、たくさんさんの苦ろうもありました。暑い夏の日の水くれと草むしりです。草むしりでは、こしがいたくなってしまうしました。農家の人たちは、いつもこんなことをやっているのかと思うと、大へんだなと思いました。そして、もう一つ苦ろうしたのが、大豆をさやから取り出す作業です。なぜかというところ、かたいさを力いっぱいむくと中から大豆がとび出してしまうので、むく時の力の入れ方がとてもむずかしかったからです。とび出してしまった大豆は、ポップコーンの様にパーンとはじけて、コロコロとどこかへころがってしまうので、集めるのにも苦ろうしました。

ぼくは、生まれて初めて大豆を育てました。さい初は、とても小さい大豆だったのに畑に植えて水をくれたり、草むしりをしたり、大切に育てたら、きれいな緑色のえだ豆に育ちました。そのえだ豆をゆでて食べた時はおいしくてほっぺが落ちそうでした。それから、だんだんこげ茶色にかわってきて丸くて小さくてピカピカした大豆に育った時には、大きくなったな、苦ろうしたかいがあったなと、と

てもうれしかったです。いつも、えだ豆や大豆は、スーパーで買っていました。が、三年生の農業科で大豆を育てるべん強が出来て本当によかったです。自分たちの育てた大豆でとうふを作るのが今からとても楽しみです。色々教えてもらった豊子先生ありがとうございました。

## 初めてのサラダパーティー

第二小学校 三年 湯上 采

わたしは、三年生になってサラダパーティーをしました。そこで、野菜のおいしさを知りました。好ききらいがあったわたしは、野菜の中にも好ききらいがありました。でも、自分たちで作ったサラダを食べて、少しだけ好ききらいをなくすことができました。わたしの好ききらいがへったのは、このポテトサラダのおかげです。

どうしてポテトサラダを作ることになったかというと、学校の畑で野菜を育てることになったからです。三年生では、ピーマン、じゃがいも、にんじん、トマトを使ってポテトサラダを作ることになりました。その中でじゃがいもとにんじんとトマトを使ってポテトサラダを作ることにな

りました。

初めてのポテトサラダ作りは、大へんでした。作っているとき、ほうちようで野菜を切るのがきんちようしました。ほかにもにんじんの皮をむくのもきんちようしました。くろうして作ったサラダは、おいしい特べつな味でした。あまじよっぱい味で、くろうして作ったかいがあったなあと思いました。

来年はカボチャを育ててみたいです。今年のトマトは、カラスに食べられてしまったので、来年はかしを立ててみたいです。こんどこそは、トマトもせいこうするように、しっかりとたいさくを立てようと思いました。ほかにも育てたい野菜があるけど、一番育てたいのはこの二つです。これから好ききらいをなくすようにがんばりたいです。

### 自分で育てられた野さい

豊川小学校 三年 齋藤 隆汰

五月十日、農業科のべん強で、インゲン育てる事になりました。ほかには、カボチャや、カリフラワー、トウモロコシ、ブロッコリー、オクラがありました。その中で、

インゲンのたねは、ピンク色でした。そして、黒いポットに土を入れて、たねをまきました。それから、水当番を決めて、毎朝、水をくれました。それから、二か月半ぐらいたって、インゲンのさややつぼみがついてきました。そのころの大きさは、十五センチメートルぐらいありました。みんなで、

「大きくなったね。」  
と、言いました。

七月一日、今までつぼみだったのが、やっと花になりました。ぼくは、それまで、どんな花がさくのかなと思っていました。ぼくはドキドキしました。見ると、白くてきれいな花でした。いい事がもう一つありました。今まで、ポットに入っていたのをやっと畑に植えられたのです。ぼくは、すごくうれしかったです。

九月三十日、畑に行くと、インゲンがいっぱいなくなっていました。だいたい十八本ぐらいありました。インゲンを持ち帰り、はんのみんなで分けました。

家に持って帰って、ばあちゃんに見せたら、  
「大きくて食べられないよ。とる時期がおそかったんだよ。」  
と言っていました。

ぼくは、すごく楽しみにしていたのですごくさんねんでした。でも、見ただけで、食べられるかどうか分かる農家さんは、すごいと思いました。いつも、ばあちゃんやじいちゃんや、田んぼや畑であせ水たらしながら、いっしょうけん命育ててくれるので、おいしいお米や野さいが食べられるんだなあと思いました。ぼくも、来年は、おいしい野さいを持ち帰り、いつもぼくたちのためにはたらいてくれるじいちゃんやばあちゃんに、おんがえしをしたいです。

## 一年に一度のいちごの収かく

熱塩小学校 三年 檜澤 壮空

ぼくは、二年生の十一月ころにいちごのなえを植えました。なえをうえ終わったころ

「はやく育ってほしいな。食べたいな。」

と思いました。冬になり、いちごのなえは雪にたえていました。ぼくは心の中で

「がんばれ。がんばれ。」

とおうえんしました。

冬がすぎ春になりました。

雪がとけた時、ぼくは、いちごを見に行ってみました。そしたらちゃんと育っていました。ぼくはうれしくなりました。

始業式が終わってしばらくしてから畑へ行ってみました、花がさいていました。白くてかわいい花がさいていました。花がいっぱいさいていたので、いっぱいいちごがなりそうな気がしました。

五月のはじめにまた畑へ行ってみました。こんどは、小さないちごがなっていました。ぼくは、うれしくて

「はやく食べたいな。」

と言いました。

やつと、しゅうかくの日になりました。ぼくは、おちていないいちごをとり、あらって食べてみました。とても甘くてとてもおいしかったです。外で食べるいちごはしんせんです。ぼくはいちごに十こぐらい食べました。のこったいちごを四年生がいちごジャムにしてくれました。ぼくたちもなめさせてもらいました。甘ずっぱかったです。

ぼくは今年三年生になりました。ぼくは、いちごのなえが植えられないことがわかりました。でも二年生がいちごのなえを植えると聞いて安心しました。来年もおいしいいちごが食べたいです。

## はじめての野さい作り

加納小学校 三年 渡部 真央

わたしたちは、三年生になってから四年生とはじめての野さい作りをしました。

一学きは、はじめてポップコーンとじゃがいもをうえましました。さいしょにどんなことをするのか、ドキドキしていました。野さい作りの先生である岩下先生やさわい先生にいろいろなことを教えてもらいながらやりました。たねをうえて何日かして、間びきをしたりしていいよはじめてのしゅうかくでした。さいしょは、むずかしいと思ったけどかんたんにじゃがいもやとうもろこしをしゅうかくできました。じゃがいもは、バターやしおをつけて食べました。とうもろこしはゆでて食べました。友だちと、「おいしいね。」

と言いながら食べました。はじめて自分たちで作った野さいはとてもおいしかったです。

二学きには、大こんと白さいを作りました。九月にたねをうえました。さわい先生に、

「白さいのなえをもって土にあなをあけて、そこにうえます。」

と教えてもらいました。うまくうえられて、よかったです。それから、地区のはんで虫とりをしました。

いよいよ二回目のしゅうかくでした。白さいは、先生たちが根っこを切って外の葉をむきました。大こんは、「よいしょ。」

と言いながらぬきました。ぬけたときは、大こんが大きく育っていてうれしかったです。しゅうかくした大きな大こんを使って、みんなでおでんを作って食べました。大こんは、やわらかくてとてもおいしかったです。

一学きから二学きまでいろいろな野さいを作ってきて、自分たちが育てた野さいは、とてもおいしかったです。わたしたちは、「野さいの命をもらって食べて生きている」のだと岩下先生が教えてくれました。とてもうれしいことなので、これからも野さいをおいしく食べていきたいです。

## ピーマンを育てて思った事

第一小学校 四年 栗原 実香

私は総合の学習でさいばい活動をしました。私のグループは、ピーマンを育てました。なぜピーマンを育てたかと

言うと、私はピーマンがにがてでいつも食べてなかったからです。ピーマンを育ててピーマンが食べられるようになったらいいなと思って育てはじめました。

ピーマンを育てる時、なえから育てました。ピーマンを育てるのはとてもむずかしかったです。夏休みも水をあげて、ピーマンをとらないでほったらかしにすると、ピーマンが赤くなってしまうからです。最初、学校でとったピーマンは学校で食べました。ピーマンで料理した時に、ピーマン食べられるかなと思ったけど、食べてみたらとてもおいしくて、自分で作ったのはおいしいんだと思いました。

初めはピーマンは少しだけしかとれなかったけど、どんなつぼみがでてきてピーマンがたくさんとれました。

家にピーマンを持って帰って料理をしました。家族みんなに食べてもらったら、

「おいしい。」

とか

「すごいね。」

と言われてとてもうれしかったです。

私はこの活動をして思った事は、ピーマンを自分達で育ててみてピーマンを食べられたのもうれしかったし、友達と協力してピーマンを作れたのもうれしかったです。また、

家族みんなで話す時にこういう話題が出てくるのもうれしかったです。

私は総合の学習で色々な野菜を育てて、野菜はどんなに大切か知ることができたし、色々勉強になったからこういう学習をまだまだ続けたいと思いました。

## 野菜を育てて感じた事

第二小学校 四年 鈴木 菜緒子

私達は、畑でたくさん野菜を育てました。オクラ、ナス、キュウリ、カボチャ、ニンジンなどたくさん育てました。

私は、ニンジン育てました。ニンジンの種は小さく白い色でした。それを三つ四つぶまきました。そして、水をやったり、草がはえてきたらみんなで草むしりをしました。

育てて分かった事があります。それは、それぞれの葉の形がちがうという事です。ほとんど同じだと思ったけどちがう事が分かりました。ニンジンの葉の形はギザギザでジャガイモはおちばのような形とそれぞれ形がちがっていました。そして花の色もちがいます。キュウリの花は黄色、

## 農業科の思い出

豊川小学校 四年 大江 純

ピーマンは白い色、ナスはむらさきの花の色です。ニンジンでは中が花がさくことをはじめて知りました。朝はやくきて、水やりもしました。そのおかげでたくさん収かくして家に持ちかえり、料理して食べました。ナスは、おみそしてにしたりして、キュウリは、みそをつけたりして食べました。とてもおいしかったです。そして、学校では、みんなが野菜をしゅうかくし、その野菜でカレーやシチューを作って食べました。私のはんは、シチューを作りました。自分達で育てた野菜で作ったシチューはとてもおいしくて、いつものシチューよりもとてもおいしく感じました。今まで育てた野菜を食べるのが少しもったいなく感じました。でも今まで野菜を育ててよかったと思います。なぜなら野菜を育てていろんな事を知ったからです。自分で育てるのは大変だけど、とても楽しかったです。

次は、落花生です。落花生は、種をまいて、しゅうかくしてから水できれいに洗います。そして、かんそうさせます。かんそうさせた落花生をみんなで食べました。とてもおいしかったです。

一年間野菜を育てた反省は、朝早く来て、野菜に水やりをしていたら、とてもおいしい野菜ができました。とてもよかったです。

私は、農業が大好きです。なぜかと言うと畑に行くたんびに大きくなっている野菜を見るのが好きだからです。三年生のときに「すがたをかえる大豆」をやったから大豆を育てることになり、そのほかにあいづのきょう土料理のこづゆを作ることになったために里いもとにんじんを育てることになりました。

私が活動の中で一番心にのこっているのは、里いもほりです。一つのかたまりを二人ですこしずつほりました。親いもをほるのが大変でした。

みんながいっしょうけんめいほった里いもはぜんぶ合わせて二百こぐらいありました。いっぱいあまったのでみんな十こぐらいずつもちかえりました。もちかえった里いもをおばあちゃんに見せるとおばあちゃんはびつくりした顔をして

「すごいね、りっぱな里いもだ。なにを作ってほしい。」

と言いました。私は

「いもにがいい。」

と言うとその日の夜にいもにを作ってくれました。とても

おいしかったです。

私は、家で自分で野菜を作って自分でみそしるやサラダなどを作ってみたいです。ことし作ったにんじんは、ばくはつしてしまったのでにんじんをリベンジしたいです。まだ学校でしか野菜を育てたことがないので、もっといろいろな野菜を育ててみたいです。私は初めて農業のことで感謝しました。なぜかという、見に行くたびに大きくなる里いもを見ているとすごく感謝します。らい年はバージョンアップで田んぼでお米を作るのでいままです以上に心をこめて育てたいです。

## 生きている物を育てる

加納小学校 四年 長井 穂乃実

去年からやっている野菜作りは、今年で終わりです。

私が一番心に残っているのは、秋まきの野菜を育ててきたことです。

九月六日に、大根と白菜の種をまきました。まく時、三十センチメートルのぼうではかつて、ビールかんで印をつけることを岩下先生に教わりました。「へえ。これを使う

んだ」と少しびっくりしました。それを使ってやってみると、すらすらとていねいに種がまけました。家で種まきの手つだいをした時、この方法でやってみたいなと思いました。

そして、九月二十六日に間引きをしました。私たちは、ひりょうをまきました。岩下先生がていねいにやさしくまき方を教えてくださったので、上手にすばやくまくことができました。

十月ごろから、虫とりをはじめました。私は寒くて、「少しやだな。」などと思っていました。けれど、寒い中元気に育っている白菜と大根を見て、「がんばるぞ。もっと元気においしく育ってね。」と思つて、真けんに虫をさがしました。

そして、十一月になりました。いよいよ大根と白菜のしゅうかくをしました。白菜はとても大きくて、たくさんしゅうかくできました。数をかぞえてみたら、百個もあったのでびっくりしました。大根もとてもりっぱに育っていたのでとてもうれしかったです。

野菜作りをやってきて、学んだことが、二つあります。一つ目は、みんなで協力して、心をこめながら野菜を育てるということです。二つ目は、生きている物を大切に育て

る、生きている物を大切に食べるといことです。私は今まで、何も思わないで野菜を食べていました。けど野菜作りをはじめて、私たちは生きている物を食べてるんだと学びました。これからは、感しやして野菜などを食べたいなと強く思いました。

## がんばった農業科

姥堂小学校 四年 湯浅 諒也

今年の農業科のじゅ業では、きゅうりやミニトマト、さつまいも、ピーマン、スイカ、メロンの苗植えをしました。しえん員の手代木先生にポットに苗が入っているので、土がくずれないようにと教えてもらいました。

夏は暑かったので水くれをがんばりました。ちゃんとやらないとかれてしまうのでわすれないようにしました。

しゅうかくの時期はいろいろで、夏にできたきゅうりとミニトマトをもらって帰り、家でばあちゃんがサラダを作ってくれました。

「新せんでおいしいね。」

とばあちゃんに言われて、水くれをがんばってよかったな

と思いました。

秋には、さつまいもをしゅうかくしました。スコップでほつてもなかなかぬけなくて、そう太君といっしょに手で土をかきわけながらぬきました。さつまいもはぼくが思っていたより、太くて大きくてびっくりしました。家で、やきいもにしたりさつまいもサラダにして食べました。みんなさつまいもの大きさとあまさにびっくりしていて、ぼくは一生けん命に育ててよかったなとうれしくなりました。そして学校では、ばあちゃんたちと大学いもとさつまいもきんぴらを作りました。みんなで協力して作った料理は、ふつくらしていておいしかったです。

大変だったのは、しゅうかくの後の後かたづけです。根っこがからまっていたり、茎が長くなっていてなかなかぬけませんでした。でも、きれいにぬかないと来年また新しい苗植えができなくなるので、ゆう大君といっしょにひっぱったりしてがんばりました。

毎日ぼくが食べているやさいは、とうばあちゃんが作っています。やさいができるまでひりょうや水くれ、草むしりをしながらおいしく作ってくれているのがわかりました。これからもやさいをのこさず、感しやして食べたいです。

## 農業の大切さ

駒形小学校 四年 斎藤 稜真

五月から十月までの間、駒形小学校の全校生で農業支援員のみなさんといっしょに、野菜を作りました。四年生は、ニンジンとカボチャ、スイカ、トマトを作りました。中でもぼくは、お友達の実叶くんといっしょにカボチャを育てました。

まず、ぼく達はカボチャのなえの植え方を農業支援員の方々に教えてもらっていっしょに植えました。土をほってカボチャのくきをおらないように、しんちょうに植えました。ぼくは、

「大きくてとても美味しいカボチャができますように。」

と思いながら作業を進めました。他の野菜を作っていた人達も、ぼく達と同じような気持ちでがんばっているのかなと思いました。

カボチャができるまでの間、草むしりや水くれをしました。畑に行くたびに、カボチャがどのくらい大きくなっていくのかがとても楽しみでした。他の人が作っている野菜もどう育っているか楽しみだったし、早く食べたいなあと思いました。夏になると、スイカがやっとできました。そ

のスイカは、四年生だけで食べるのではなく全校生でわけて食べました。ぼく達のカボチャも給食にできるようになるといいなあと思いました。ニンジンはしゅうかく祭で食べ、トマトもみんなでお食べしました。他の学年が作った野菜と、五、六年生が作った米もしゅうかく祭でみんなでおいしく食べました。

ぼく達の作ったカボチャが給食に出された時、みんながおいしく食べてくれてがんばって作って本当によかったなと思いました。

野菜をやることや食べてもらうことがこんなにうれしいことだと気づけてよかったし、また作ってみたいです。

## 大豆ってすごい

山都小学校 四年 平井 理子

私は、喜多方市に転校してきて初めて農業科の勉強をしました。私は、以前郡山市に住んでいたので、農業科なんて勉強も農業をやったことすらありませんでした。

春。ここに来てちよつとしかたないころのそう合の時間。先生が黒板に、今年のそう合でやることを書きました。

英語学習、花だんの花の世話、農業科。私は、「農業科ってなんだろう。」と思いましたが先生が、

「農業科っていうのは、畑で自分たちで作物を作る勉強ですよ。」

と説明してくれました。そして、農業科という文字の横に「ダイズ」と書きました。

それから何日かたって、大豆について勉強しました。大豆は「根粒菌」からよう分をもらうので、やせ地でもよく育つということを知りました。そして、タンパク質も多くふくまれている「畑の肉」と呼ばれていることも知りました。

六月十六日木曜日。いよいよ種まきです。小さく分かれているポットに、大豆をまきました。「大きくなってほしいな。」と思いながらまきました。それから一週間ぐらいたってやっと大豆が芽を出しました。小さくてかわいくて、「農業っていいな。」とちよつと思つた時でした。それからもぐんぐん育つて畑へ植えかえたりしながらどんどん時間はずぎ、夏休み半ば。宿題になつている大豆のかんさつに行くことにしました。行ってみると、そこには、ぎつそうだらけの畑が見えました。すごくのびほうだったもので観さつの後、おばあちゃんと草むしりをしました。土い

じりはいやだったけど、大豆がかわいそうだったのでやる気が出ました。

それからもぐんぐん育つて、しゅうかくの時が来ました。暑さにもまけないで育つた大豆は、とても力強くうれしかったです。そして、植物も人間と同じように生きているのです。

## 一年間農業をして

高郷小学校 四年 横川 千亜希

一年間農業をして、びっくりした事や、初めて知つた事を耶麻農業高生や、武藤さんにいっぱい教えてもらったことです。

私たちが作つた作物は、まず、大豆、ミニトマト、ナス、キュウリ、里いも、大根、ピーマンです。それぞれの野菜の育て方で、大変だった事がたくさんありました。

大豆は種で植えました。一番大変だったのは、しゅうかくです。くきや葉に栄養がいきすぎて、豆がとても小さくなつてしまいました。

三年生の時に、私たちは一度育てましたが、すくすくと

のびて、実も大きく、いっぱいになりました。今年は小さくて、中の実も小さいので大豆をえだ豆にして食べました。

食べたらとても小さくて、あまり甘くなかったです。

一、二、三、四年生でまだ作っていない作物を、五、六年生になった時に作って、たくさん野菜を食べてみたいです。

里いもは、自分の家でも作っているけど、学校と家とのちがいは、作り方でした。家のはいもが小さいけど、学校のは大きくて、りっぱでした。

来年は、育て方が少しむずかしい野菜など、いろいろちようせんして作ってみたいです。わたしのおじいちゃんはいろいろな野菜を作っていて、アドバイスもしてくれます。まず、水は、こまめにやること、病気にならないように、愛情を持って育てることが大切だと教えてもらいました。来年もためになるアドバイスをしてもらいたいです。

作物をただ育てることはかんたんだけど、大きく育てる事は、苦労しないとだめなことが分かりました。来年も愛情を持って育て、家の人の手伝いもしたいなと思います。

## はじめての田植え

第一小学校 五年 佐藤 暢晃

十一月二十二日にぼくたちは自分たちで作ったお米で調理実習をしました。はんで協力して、ふっくらおいしくたけるようにがんばりました。茶わんにもりつけたら、いつも食べているご飯とそんなにかわりませんでした。でもよく味わって食べてみたら少しちがうおいしい味がしました。それは自分たちでおいしいお米になるように苦労して植えたからだと思います。

六月三日、ぼくたちはとよさんの家の田んぼに行きました。そしてとよさんからなえの植え方を教わりました。「なえは二、三本取って植えてください。それとなえは深く植えないでください。」

と、言われました。なえを少しもらってから田んぼに入りました。でもドロドロの土の中に入るのはなんだかいやでした。サンダルをぬいではだしで入るとき、足がよごれなにか心配でした。でもほかの人が、

「気持ちいい。」

などと言っていたのでぼくもゆつくりと入ってみました。最初はヌニツツとして変な感じでしたが、だんだん気持ち

よくなってきました。ぼくは田んぼの中を歩くのに、力を入れながら足を上げたり下げたりしました。そしてもらったなえから、二、三本ぐらいずつ分け、とよこさんたちがつけてくれた線に合わせて植えていきました。みんなで協力してがんばって植えました。やっとなえを植え終わったら、足や手、服がどろでよごれて、こしもいたくなってきました。今は機械でやっているけど手作業で田植えをやる人はとても大変ということがよく分かりました。

みんなで田植えをしてから四か月、小さななえが大きく育ち、おいしいお米ができます。日本人の主食であるお米や、ぼくたちがいつも食べている野菜をつくる農業は、大変な仕事だけどとても大切なことだと思いました。

## ぼくたちの主食を

第一小学校 五年 武藤 誠

ぼくたちの主な主食は米です。そんな米は、どのようにして作られているのか、学校の授業で田植え・稲刈り体験をしました。

田植え体験では、条板で縦横に線を引いた十字マークの

交わっている所に苗を二、三本まとめて植えました。現代では田植え機などで植えています。昔はぼくたちが体験したようなとても辛い思いをしたと思います。腰を曲げての作業、何時間もかけて米のために苦勞をして、昔の人はとても強い意志を持っていたことを実感しました。

それから何ヶ月か経ち、いよいよ稲刈りをする時がやってきました。刈り方は鎌で稲穂の根元からだいたい三分の一の所を手で持ち、一回でザクッと刈ります。田植えの時と同じで、昔は稲刈り機など無く、それにぼくたちの体験では多人数でやりましたが、少人数でやっているのだと思うと、どれだけ苦勞をしていたのかがよく伝わってきました。

ぼくたちが体験したのは、田植え・稲刈りの二つですが、その間にも山ほどの作業があるのは、農業科の調べ学習で知っています。現代では、やはり機械を使って米の管理をしています。昔は何もないのにどうやって米の管理をしているのか、疑問を持ってきました。それにしてもよく現代まで米づくりが伝わったと思います。ぼくたちの給食をつくっているセンターの栄養士の人から、米についてのお話を聞いて、米づくりはなんと縄文時代時から伝わっていたと聞き、びっくりしました。

そんなに昔から伝わっている米づくりに関心を持ちました。食卓には必ずと言って良いほどご飯が並びます。もつとご飯、米を大切にしていき、残さず食べたいと思います。

## 私を変えた前田さんの言葉

第二小学校 五年 津田 さくら

私達の学年は、去年から自分達で育てた野菜を販売する、野菜販売をして来ました。新せんでおいしく、無農薬の野菜を他の人にも食べてもらいたかったのです。そして、野菜はとぶように売れました。一ざる五十円の値段にした事と、思いきってチラシを配り始めた事が良かったのかな、と思いました。

でも、野菜を育てる事はそんなにうまくはいきませんでした。なぜなら、毎日の水やりや、まめな草むしりなどの野菜の世話をしっかり行わないと、野菜は育たなくなってしまうからです。始めは草むしりをまじめにしていた私もだんだんあきてきて、一時間中、ぼーっとしている事が多くなりました。「めんどくさい。」と頭の中で言っている自分と「やらなきゃ！」と言っている自分がいました。

私はどちらかというと「めんどくさい。」の自分に賛成していました。

そんな風に私が思っているでも、野菜は売れます。だんだんお得意欲もふえて来ていて、今売れていく野菜は、私の気持ちとはうらはらに、とても輝やいて見えました。

そんな時に、私は前田さんの話を聞きました。前田さんは、こう言いました。

「みなさんは、野菜をおいしく育てるために、たくさん害虫を殺しています。普段、なにげなく食べている野菜も、そうした虫の命があつてこそものなのです。みなさん残さずしっかり食べて下さいね。」

私は、虫の命がこんなに野菜とかかわりがあるのを知っておどろきました。そして、野菜のために、私達が殺してしまった虫達がちゃんとじょう仏するように、これからは草むしりをしっかりやって、おいしい野菜を作っていこうと思いました。

私は、前田さんが話してくれた虫達の話をお忘れしないで、これからも野菜作りに励んでいこうと思います。来年は、どんな味の野菜が育つかなど、今からとても楽しみにしています。

## 農業学習何のため？

松山小学校 五年 宮盛 夏菜子

「今年は、枝豆かあ、めんどくさいなあ。なんで農業学習ってあるんだろう。」

そんな言葉から始まった今年の農業学習。

今年は、私達が豆まきの年女年男だから、枝豆の豆を煎って袋に入れて、他の学年へ渡す。そのための豆だ。

まず、種まきをする。次に草むしりをする。

その次に、収穫をする。最後に豆打ちの順番だ。豆打ちをしている時も私は、まだ考えていた。

「なんでこんなに手を、わざわざ汚さなきゃいけないんだろう。」

そのつぶやきを聞いていた友達が、

「おいしいものを食べられるんだから、いいじゃん。」

と一言。私は、

（なるほど、そうかこれは、おいしいものをたべるための、作業だったんだ。）

と心の中でうなづく。何か一つふっきれたような気がした。そう考えているうちに、ある光景を思い出した。それは、支援員さんと友達が話しているところだった。内容は、

「なんで、種って赤くそめてあるんですか。」

私の友達が聞いている。支援員の人は、

「鳥に種を食べられないためだよ。」

と笑顔で答えている。なんだか見ると、心があたたまると、そこで先生に、

「なんで支援員の人がいるんですか？」

先生に聞いてみた。

「せんもん的な知識をもっていて、近くに住んでいるからだよ。」

と答えてくれた。

全てのなにかがふっ切れた。農業学習は、植物の育ち方や植え方を学ぶための勉強だったんだ。それ以上のことが分かった。それはおじいちゃんやおばあちゃんの知恵を生かすための学習だったことに気付いた。そして、今教わったことを、私達が次の世代へ教える。そのくり返しだ。農業学習は、とても大事な勉強だったんだ。農業学習大好き！

## やさしさと一粒のお米

塩川小学校 五年 山内 ひなた

「どれだけ大きくなったのかな。」

「想像がつかないね。」

こんなことを話しながらあぜ道を歩きました。

私達ががんばって植えた稲がどこまで大きくなりどれだけたくさんのお米がとれるのかを頭の中で考えただけでも楽しみでした。

指導者の方々の話を聞き私はドキドキしながらかまを持ち稲の前に立ちました。指を切ったらどうしようなど不安もありましたが、

「稲たくさんとれたね。」

と友達の言葉に不安も消えカマを使ってどんどん進めました。活動していくうちに、ひたいに汗がうかび足がいたくなり改めて農業の大変さがわかる気がしました。でも、これでお米ができるという気持ちが高まると稲かりの楽しさも、少しずつ私の心にこみあげてきました。

あつという間に時間が過ぎて、田んぼの稲はあとわずかになりました。かり終わってしまうのがさみしい気持ちもありました。しかし、それ以上に活動をやり終える満足感

のほうが強くなりました。

稲かりが終わると私達はかった稲をもってプールのフェンスにその稲をかけました。ずしつと重く感じるたびに早くおいしいお米になってほしいと思いました。また、稲のいいおいがフェンスの周りにただよって晴れ晴れしい気持ちになりました。

私は、今回の「米作り学習」を通して、春のビニールハウスでの苗作りから、秋の稲かりが終わるまでの約八カ月の間、農家の人々が一本一本の稲の命をたいせつにし、やさしい気持ちで仕事に取り組んでいることが分かりました。また、私がいままで食べていたご飯が、こんなにやさしい人々の努力によって食卓にならぶことも分かりました。

いままでなにげなく食べていたお米、私はこれから一粒一粒しっかりと味わって食べたいです。

## 農業って素晴らしい

第二小学校 六年 渡辺 夢子

私たちの学校では、農業科の時間をつかって学年ごとに野菜を作っています。六年生は、茄子とピーマンとじゃが

いもです。

私はいつも、野菜の苗を植える時は「水やりをやるぞ。」とか、「草むしりもやろう。」と思うのですが、いざとなると面倒になって結局やらず、授業の時に、みんなとやるくらいしかできませんでした。なので、今回はちゃんとやろうと学級の係で水やりをしたり、野菜を収穫したりすることにしました。

そして朝、係の友達といっしょに水やりをしました。しかし、最初は続けていた水やりが、だんだん二日に一回、そして三日に一回と、どんどん回数が減ってきて、係ではない子が進んで水やりをしていました。それを見て、私も水やりをしつかりやろうと思いました。さぼった日もあつたけど二、三ヵ月たつと大きくなって実がついていました。

次はいよいよ収穫です。今年は暑い日が多かったので、茄子やピーマンはとてよく成長していてうれしかったです。特に茄子は、二十センチぐらいのすごく大きいのがなっていてびっくりしました。また、野菜の収穫は毎日やることはないのです、ちよつとほつとしたこともありました。

野菜の収穫は水やりとちがい、友達と、

「これ、変な形だね。」

と、笑いながらやれてとても楽しかったです。

でも、一つ残念なことがありました。それは六年生全員でじゃがいもをほって見たら、小さいじゃがいもばかり出てきたことです。それでも、何個か大きめのじゃがいもが収穫でき、みんなでカレーを作って食べました。

私は、この農業科の勉強で農業の素晴らしさを学びました。農業を通して自分にかかる責任の重さ、植物の力強さがわかりました。植物があるから自分が呼吸していて、野菜があるから生きていけるんだと改めて感じました。

このことをこれから生きていくうえで役立てていきたいと思います。

## 里芋を作って

松山小学校 六年 川口 絢也

今年、ぼく達松山小六年生は、学校の畑で里芋を作りました。ただ残念なことは、里芋は収穫まであまり手間がかからなかったことです。

里芋は植え方に特色があり、種芋を植える時に、マルチという黒いビニールで土をおおい、丸い穴をあけた所に植えていきます。この方法はなぜかというと、暑い日差しを

さけることと、保温状態を保つ役目をする事です。ただぼくが心配したのは、草むしりに行った時、マルチの穴の中に手を入れてみたらとても暑くなっていて、やっと出始めた芽が焼けて死んでしまうのではないかと思ったことです。ですが、そんな心配をよそに順調に成長していきました。

ぼくは毎回畑に行くのが楽しみでした。それは、そのとなりの畑にある「とうもろこし」「枝豆」「かぼちゃ」など、他の学年が作っている作物の成長を見ることが出来るからです。ぼく達の里芋は土の中で成長するために様子を見ることができず、くきや葉の状態しか観察ができませんでした。

里芋の収穫は、一番大変だったかもしれません。それは、里芋をぬく作業です。なぜかというと、とても力がいり、中には、女の子がぬけないこともあるからです。その里芋には、四〇六ぐらいの芋がついています。だけど、芽が出たりするのとも多かったです。収穫時期がおそかったのかもしれない。

それからしばらく日が立ち、その里芋を使って料理をしました。それは、「カレー」と里芋のひき肉和え」です。その中に入ってる里芋は、周りがちよつとかたく、中はねば

りけがあつてとてもおいしかったです。家に持ち帰ると、みんな喜んで食べてくれたのでとても嬉しかったです。今年も、支援員さんに教わりながら、初めての作物を育て上げることができました。天気や成長を心配してドキドキしたけど、収穫の喜びや満足感は何とも言えないものでした。

### さつまいもを育てて感じた事

第三小学校 六年 真壁 日向

私たちの学校では、全校生みなでさつまいも作りをしました。放射線のえいきょうで農業科の勉強ができるか不安でしたが、喜多方市は農業科の勉強ができる事になりました。

春、学校の畑にさつまいもの苗を植えました。下級生に教えてあげながら、まだ細くて小さい苗を、どれくらい育つかの期待と、ちゃんと育てられるかという不安といっしょに植えました。

毎日交代で水やりをし、少しずつ苗も大きくなってきました。一学期が終わると長い夏休みの間、しばらくさつま

いもをみませんでした。さつまいもがどんなふうになって  
いるか不安と楽しさが混ざった気持ちでした。

夏休みが終わり、二学期初めての草とりの時間でした。

畑に行ってみて、とてもおどろきました。あんなに細かつ  
た苗が、すぐく成長していました。葉っぱも大きくなり、  
くきもしっかりしていてすごくうれしかったです。

みんなで協力したさつまいもいよいよ収穫の時期にな  
りました。つるをたどってほって行くと、さつまいもがで  
てきました。私達がみんなで育てたさつまいもがでてきた  
時、とてもうれしかったです。みんなで作ったさつまいも  
は収穫祭の時に焼きいもにして食べました。自分たちで作  
ったさつまいもは、おどろくほどおいしかったです。

私がさつまいも作りをして感じた事は、地元の野菜が食  
べられる喜びと野菜を作っている人の苦勞です。今まで何  
も知らずに食べていた野菜。しかし、今年の震災で地元で  
作った野菜が食べられない人達があります。愛情をこめて苦  
勞して作った野菜でも食べる事ができないのです。また、  
私たちがふだんなにげなく食べている野菜も、作ってくれ  
た人の苦勞と愛情がたくさんつまっているのも分かりまし  
た。これからは、簡単に残っていた野菜も地元の野菜を食  
べられる幸せと作ってくれた人の気持ちをかみしめて、絶

対に残さないようにします。

## 農業でみんなで協力野菜作り

熊倉小学校 六年 眞田 宜幸

ぼく達が作った野菜は、落花生、スイカ、さといも、ゴ  
ーヤ、にんじん、ピーマンの六種類です。農業学習は、と  
てもおもしろい授業です。授業のときは、暑い中で草むし  
りをしたり、畑を耕したりなどして大変な事もあったけど、  
いつか大きく育っておいしい野菜を収穫できると思うと、  
待ち遠しくて仕方がありませんでした。そして、とうとう  
この前すべての野菜の収穫が終わりました。結局、ぼくが  
もらえたのは、ピーマンとゴーヤだけでしたけど、あとで  
おいしくいただきました。

畑での学習のほかにも、「田植え」の学習もしました。

田植えの学習は、大人の人にも手伝ってもらって、やっと  
一枚できました。みんなで協力したからできたんだと思ひ  
ます。そして、お米を作るのがどんなに大切かというのが  
分かりました。（五年生とも協力しました。）放射線などの  
都合により、残念ながら稲かりはできませんでした。でも、

田植えの経験ができたので、ぼくが大人になって田植えするときの自信ができました。（ぼくの家は農家です、野菜やお米などを作っています。）

ぼくは、この農業がいつまでも受けつがれると良いと思います。自分の家で作った野菜の方が、スーパーなどで買った野菜より新鮮だし、なによりも「安全」です。現在は、「東日本大震災」が起こって、放射線が心配されています。しかも、レストランなどでも食中毒事件なども起こっています。現在は、信じられる物、信じられない物がはっきり分かりません。自分の家で作った物が一番安全なのです。ぼくは、ぜひ、都会（東京など）にも畑や田んぼを作ってほしいと思います。（いなからしくて面どくさい）と思うかもしれませんが、地球の環境のためにもぜひ協力してほしいと思います。

## 今年の農業科にこめた思い

豊川小学校 六年 齋藤 優奈

私にとって、今年は二年目の米づくり、そして忘れられない農業科の学習となりました。今年の春、私はとても不

安でした。それは、原発事故のえいきょうで米作りができないのではないかということです。私の家でも米を作っているので心配でしたが、放射性物質は出ず、無事米作りができるようになり、とてもうれしかったです。

農業科の作業は、五月から始まりました。今年も去年と同じく田植えをしました。素足で入るのでぬるつとした感じがまた体験できると思うと、楽しみになりました。苗一束一束に、大きく育っておいしいお米ができるようにいのりながらいねいに植えました。

それからは、苗の観察をしました。田んぼの前に登下校で通るので、少しずつ苗が成長していることが分かりました。農業支援員の只浦さんは、毎日のように田んぼに来て仕事をしていました。私達がやっている作業は、米作りのほんの少しで、米を育てている人達はもっともつと作業がたくさんあることを知り、農業の大変さを改めて感じました。

さて、いよいよ九月になりました。次の作業は稲かりです。すべて手作業なので時間がかかるだろうと思っています。只浦さんですが、流れ作業ですばやく活動ができました。只浦さんに、大切なことを教えて頂いたからこそ、成功したのだと思います。

私は今年の農業科でたくさんを感じたり、学んだりしました。震災や原発事故のえいきょうがなく、米を作れるという幸せをかみしめて作りしました。そのせいか、去年の米作りよりも力が入り、よりおいしい米ができたと思います。喜多方市内の農家のみなさんも米作りができてとても安心したと思います。これから、風評の問題もありますが負けないでがんばっていつてほしいと思います。

今年も農業科の学習ができ、おいしくあまい米が食べられて本当に良かったです。そして、只浦さんありがとうございました。

## 楽しい農業

慶徳小学校 六年 加藤 伶

「すごい。稲刈りって楽しい。」

今年も無事、たくさんのお米が収穫できました。田植えは、放射能の関係で、自分達ではできなかったけれど、稲刈りは自分達でできて良かったです。

私は、農業科の学習が大好きです。いろいろな野菜を収穫して、生き物の命の大切さを身近な所から学べるからです。それに、物知りの支援員のみなさんから、農業のこと

についてくわしく教えてもらえるからです。

今年、六年生は三つの野菜を収穫しました。玉ネギとジャガイモと大豆です。玉ネギやジャガイモは、七・八月のとても暑い日に収穫をしました。玉ネギを収穫した時は、玉ネギを束にしてほすという作業もしました。たくさん収穫ができてみんな大喜びでした。もちろん私も、とてもうれしかったです。

「農業は、簡単にできるものではないんだから、しんけんにやるんだぞ。」

これは、家で農業をやっている祖父から言われた言葉です。私は今まで、この言葉のとおりにしんけんにやっていました。しかし、しんけんにやっているからといって必ず、野菜などがしっかり育つわけではないのです。自然というのはとても怖いものです。私は改めて自然の怖さを実感しました。雨や風などでよわってしまう野菜もあります。しかし、私達は自然に負けてはいけません。祖父は、私に自然は怖いものと教えるため、あの言葉をかけてくれたのだと思います。

私は、どんなに大変でもこれから農業を続けていきたいです。そして、後世に農業の楽しさを伝えていきたいです。

じゃがいもほりから学んだこと

堂島小学校 六年 蓮沼 璃子

うれしきは畑の中のじゃがいもを

土かき分けてほりあげる時

これは、私が農業科の学習の中で一番うれしかった時を書いた短歌です。

「わあ。すごい。たくさんとれた。」

「このじゃがいも大きいよ。」

「どのくらいとれたかな？」

八月三十日、五月に植えたじゃがいもを畑に行って収かくしました。まさかあんなに小さかったじゃがいもがとても立派に育っていたなんてびっくりしました。みんながとても楽しそうにほっていたので、私も土を一生けん命にほってみました。

「わあ。」

私は思わず声に出してしまいました。じゃがいもが大きいものから小さいものまでたくさんできたのです。それからずっと夢中になってほっていたら、なかなかほってもでこないじゃがいもがありました。

「なかなかでこないね。よし、もう少しほってみよ

う。」

私と友達でがんばって土をかき分けていたら、とうとうじゃがいもが土の中から顔をだしました。私はその時うれしさがこみ上げてきました。

農業科の学習をやっていると農業の楽しさや農作物の大切さを感じてきます。みんなで一生けん命に育てて協力したり、農作物がとれた時に笑顔になったり、農作物を観察して新しい発見が生まれたり、土や砂などの自然を肌で感じたりできる農業は、とてもすばらしいと思います。私は、最初は農業をあまり好きではありませんでしたが、田植えから始まる米作りや農作物を育てていったりするうちに、私は農業をいやとは思わなくなってきました。

じゃがいもほりは私の農業に対するイメージを変えてくれました。この時感じた農業の「うれしさ」、「楽しさ」を忘れないでこれからもがんばって農業をしたいです。

## 喜多方市農業科に寄せて

「平成二十三年度農業科作文」から見えてくる子どもたちと  
いのちを育てる教育の大切さ」

宮城学院女子大学教授佐藤幸也、佐藤研究室学生レポート

### 1 子どもたちの作文を読んだ学生のレポート

(1) どの作品からも、「自分たちで作物を育てるのは大変だったけれど楽しかった」と言うことが伝わってきました。「農業を通して食べ物の大切さがわかった」というように、農業活動を通しての食育はとも意味があることだと思えます。最近では、地方の小学校でも農業活動が少なくなってきたため、子どもたちの作品を読んでいて、農業学習の大切さを改めて学ぶことができました。

(棟方史子・青森県青森市出身)

(2) これらの作文を読み、農業科をひとりひとり違った観点で体験していることがわかった。喜多方市には田んぼがたくさんあり、農業が生活の一部となり、農業を身近に感じている子どもは多いだろう。それで、喜多方市で農業科の授業があると知ったとき、子どもたちがこの授業を通じて何かを感じることは少ないのではないかと思っていた。しかし、作文を読み、自分の予想は覆された。一人一人の子どもたちは、植物の育ち方を初めて知って驚いたり、食べ物を食べられるありがたみを感じたり、また、放射能と食べ物との関係について考えたりしているの、農業科の授業や農作業体験はとても意味のあるものだと感じた。食べ

物を育てる自然や人々への感謝、食生活についても深く考えるようになる、すばらしい教育だと感じた。

(金子千佳・福島県会津若松市出身)

(3) 子どもたちは農業体験を毎年楽しみにしていた。活動を楽しんでいるだけではなく、その体験を通して野菜・果物にふれたり、自分たちで作った野菜などを調理したりすることで、食べ物を作る大変さやいのちの大切さを学んだ。さらに、日々の暮らしや身近な環境、食べ物や自然と自分との関わりについて考えることもできたのではないかと感じた。一人で作物を育てることは難しいことだろう。皆で力を合わせなければできないこともある。子どもたちは普段の生活とはまた別の場面で、協力や助け合うなどの大切さを学び、やりがいを感じることができたと思う。小学校時代から農業を体験することで、食の重要性や地域の農業、環境、自然との関わりについて考えながら、じつくりと自分自身とも向き合うことができるよい機会だと感じた。

(及川瑞穂・岩手県金ヶ崎町出身)

(4) 子どもたちの作文を読むと、その子どもの生き生きとした表情、心の底から込み上げてくる思い、自然に対する疑問、葛藤、喜び：ありありと浮かんできました。野菜が大きく育つことや食べ物をいただくことへの感謝の気持ち、地域の方の支援があるからこそ自分たちは農業ができるということ。これらのことに子どもたちが自ら気づき、自分の言葉で感謝の気持ちを表現できるのは、農業に本気で向き合ってきたからこそなのでしょう。頭も体も心もどっぷりと農業に浸かることで、ぐんぐんと、豊かに成長した子

どもたち。農業体験で培った心の強さと優しさは、今後彼らが歩む人生の「核」となっていくのだろうと思います。

（安藤みなみ・福島県福島市出身）

## 2 子どもたちの作文から学生は何を学んだか。

小学校教員を目指す学生たちは、普段、教育学や実践的な教科教育の内容、指導法などについて学んでいる。教育実習で教師として必要な知識、技術などの重要性を痛感し、その後ゼミ活動や継続的な学校ボランティアなどでそれらについて学習を重ねている。

今回「喜多方市農業科」について学ぶ中で学生が認識したことは「いのちと魂の教育」と言うことである。それは「ひとが人になる」ための子どもたち自身による学びであり、「人間の教育」の最も本質的なものである。

一九八〇代以来、教育学の世界では子どもの世界が奪われていることや「人が人になりにくい、育ちににくい」社会になったと言う議論が盛んになされ、それらを示す実証的研究が数多く発表されてきた。このことを、教育学や社会学では「発達疎外」（高度消費（資本主義）社会における人間疎外の深化、それらに伴うところの発達の歪み）などと呼んできた。「荒れる中学生」や「キレル子ども、若者たち」もそのような文脈で語られることが多かった。そして、子どもたちや保護者、教師に対するネガティブな論調がマスコミによって煽られ、そのことによつてますます教育論議が過激化する、と言う傾向も定着してきたかに見える。その結果、教育を巡る議論は「社会病理」現象として考察することも出てきた。そこにはシロート談義の無責任な

言説も見受けられる。ヴァラエティー番組の定番の一つにもなっており、出演者、評論家、司会者の放談に心を痛めている教育関係者は少なくなく、そして、このことは二重の意味で教育・学校を不幸にしている、と言えよう。

一つだけ指摘しておきたいのは、全国のあらゆる学校で教師たちや教育委員会関係者が、子どもたちや地域のために地道な努力を重ねているにもかかわらず、それらを無にするような「自己責任論」や新自由主義による「競争の教育」が幅をきかしている点である。

学生たちは、全国の教育現象、学校教育の現状を知るたびに意欲をなくし、「こんなわたしが先生を目指していいのか」と自問自答しながら教師になる夢を諦めていく。子どもたちの笑顔が見たい、周りの先生方の指導を受けて教師として成長していきたい、という思いにふたをしていく青年たちの多いことを我々は重く受け止める必要がある。

「喜多方市農業科」で学ぶ子どもたちの姿は、そうした学生に希望を与えるものである。提供された作文を、パソコンで一文一文打つ度に、子どもたちの歓声が学生の脳裏にわき上がり、美しい喜多方の風景と、支援員をはじめとする大人と子どもたち、それを慎重に見つめながら喜びを分かち合う教師たちの姿に心打たれるのである。

「食べ物を作る大変さやいのちの大切さを学んだ。さらに、日々の暮らしや身近な環境、食べ物や自然と自分との関わりについて考える・・・一人で作物を育てることは難しいことだろう。皆で力を合わせなければできないこともある。子どもたち

は普段の生活とはまた別の場面で、協力や助け合うなどの大切さを学び、やりがいを感じることができた・・・じっくりと自分自身とも向き合うことができる・・・」と及川は書いた。

子どもたちの作文からここまで読み取ることができた学生をほめてやりたいが、それだけの感動を子どもたちの作文が与えてくれたと言うこと、そうした感性や科学的な物の見方考え方（本質的学力）を「農業科」が持っている、と言うことが重要である。そのことを学ばせていただいた学生たちが、「きっと小学校の先生になっていい授業をしたい」と願うのである。「競争の教育」とは違う、一人一人を大切にし、互いに協力し合い、みんなの学びと自分の学びが共鳴し、それが指導協力してくださっている多くの人々を結びつけ「絆」を作り上げているのだ、という「会津の精神（まこと）」にふれて、希望を見いだしているのである。

### 3 「喜多方市農業科」の教育力

「農業科」には子どもへの伸びやかな成長発達を促す本質的教育力がある。そして、未曾有の災害に襲われた我々に灯りをともし教育ともなっている。この一年間、日本中の人々が「いち」「きずな」「支え合い」などの大切さを強く意識してきた。日本人の心の奥深くしまい込まれていたひととひとの助け合い・おもしろいやりなどが人間（社会）にとって最も大切なものであることを、高度経済成長と共に失ってきた精神性と社会的仕組みの回復が復興の基盤であることを再認識している。

それらの基盤を形成するのが教育である。家庭と地域が協力し合う小学校の教育はそこに立脚する。この教育を「社会（的）

共通基盤資本」（宇沢弘文氏に学びながら）と呼びたい。「いちを大切に」「こころの教育」といったスローガンは日本中にあふれているが、それを地域全体で実践している例は少ない。ある小学校がやっつけていても隣は関心すらないと言うことは普通に見られることである。だからこそ、喜多方の取組は一層の輝きを増す。

子どもたちの作文には（センス オブ ワンダー）と農家や農業、家族等への愛情が満ちており、「いのちにありがとう」と語る。子どもたち自身が自分の変化（成長）を見つめ、農業科と共に育つ自分を喜んでいる。

多くの困難が伴い、人々の評価も多様であろうが、喜多方の教育は日本の教育の在り方に多くの示唆を与えてあまりある。なによりも「子どもたちを大切に」、その大切にされている子どもたち自身がそれらを受け止めしっかりと学習し成長している。

「農」を核にしながらい大人も子どもたちも育ち合う姿がある。これは「魂の教育」とも言える。

明治維新以来、幾多の困難を乗り越えてきた会津の誇りと粘り強さ、優しさが凝縮した教育、それが「喜多方市農業科」である。

（この教育に学ぶ機会を与えていただいた喜多方の皆様にご学生共々深く感謝申し上げます。鎮魂と復興への祈りを込めて。）

## 平成 23 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

### 【審査委員】

|                                   |        |
|-----------------------------------|--------|
| 福島県会津農林事務所喜多方農業普及所<br>経営支援課長      | 長谷川 一朗 |
| 会津いいで農業協同組合営農部長                   | 鈴木 幸男  |
| 喜多方市 P T A 連絡協議会会長                | 大竹 泰司  |
| 喜多方市立熊倉小学校長                       | 大堀 浩平  |
| 喜多方市小学校農業科支援員<br>・喜多方市小学校農業科委員会委員 | 山田 義人  |
| 喜多方市教育委員会学校教育課長補佐・指導主事            | 藤田 信一  |

### 【特別審査委員】

|             |       |
|-------------|-------|
| 宮城学院女子大学 教授 | 佐藤 幸也 |
|-------------|-------|

※この作品集は宮城学院女子大学佐藤研究室の全面的な協力により  
編集・発行することができました。心より感謝を申し上げます。

### 編集後記

今年度から喜多方市内のすべての小学校が農業科に取り組み、この作文コンクールも3回目を迎えました。1,828 点の応募作品には、子どもたちが農業を通して感じたこと、学んだこと、考えたことが自分の言葉で表現されており、1年間の学習の成果を確認することができます。各学校の具体的な取り組みは様々であり、この作品集を読むことでそれぞれの様子を垣間見ることができます。小学校新学習指導要領の全面実施により、農業科は総合的な学習の時間の1つとして位置づけられています。農業を体験するだけで終わらず、探究や協同といったねらいに迫ることができるよう、今後も支援員の協力のもと、各校の創意工夫を生かした取り組みに期待しています。

(指導主事 藤田 信一)

以前は、都会の子どもたちの農業体験を受け入れるグリーン・ツーリズムを担当していました。都会の子どもたちが喜多方でのたくさんの感動をお土産に帰ってゆく姿を何度も見送ってきました。一方で感じていたのは、「地元の子どもたちは農業を知らないのでは？」農業を身近に感じる事ができるのにもったいないという思いでした。今、こうして地元の子どもたちが農業科を学ぶ姿を見ることができて本当に良かったと思います。このコンクールに寄せられた作文には、子どもたちの感性の豊かさ、心のあたたかさ、大きな感動が詰まっています。ここに載せることができた作文は、ほんの一部にしかすぎません。農業科に正解や答えなどなく、感動を与えてくれたみんなの作文が 100 点満点でした。これからも思いっきり農業科を楽しんでほしいと思います。

(担当主査 渡部 通)

小学校農業科では、先生方や農業科支援員さん、地域の方々から農作業を教わりながら「自分達で作りたい野菜を考え、それを育てて収穫・料理してみんなで食べる」という経験から、子どもたちが成功・失敗しながらも、「もっと頑張っておいしい野菜を作ろう」という心も育んでいるのだなと思いました。今年は、震災・原発事故等もありましたが、子どもたちは農作業を通して、実った事への感謝や農業の大切さなど前向きに捉えています。作文コンクールで作業の様子や子どもたちの思ったことを形に残すということは、とても素晴らしい事です。彼らが大人になった時「自分は当時こう思っていたんだ」とこの作品集で振り返ることができればいいと思います。(担当職員 谷野 晃子)

## 平成 23 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 24 年 3 月 発行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会

